

Living the Lotus 6

Buddhism in Everyday Life

2026
VOL. 249



立正佼成会ロサンゼルス教会

Living the Lotus Vol. 249 (June 2026)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 前田 貴史
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

苦しみも人生の友

庭野日鑪
立正校成会会長



苦悩は自らつくっている

私はこれまでみなさんに、しばしば「コップに水が半分入っているとき、それをどのように見るか、受けとるか」という問いかけをしてきました。著述家の小林正観氏は、「半分しかない」と不平不満で見る見方、「半分も入っていてうれしい」と喜ぶ見方、「だれかが半分残してくださった。ありがたい」と感謝で受けとる見方があるといいます。ただ、どの見方・受けとり方も、そのような意味づけをしているのは自分であって、事実には「コップに水が半分入っている」ということだけ。不満を感じるのも喜びや感謝で受けとるのも、すべて「私」自身の心だということです。

在家の私たちにとって仏さまの教えは、できるだけわかりやすく生活化できることが大事だと私は思っていますが、この小林氏の著述は、「般若心経」で説かれる「色即是空」の教えをもとに、楽しいことも苦しいことも、すべての現象は私たち自身が勝手な意味づけをして一喜一憂していると教えるものです。とくに苦しみや悩みの原因だと思う現象は、独断や偏見、思いこみや願望、そして迷いや執着などによって自ら苦の種にしていることが多く、「その見方や受けとり方を変えれば、もっと楽に生きられますよ」という、生活に根ざした仏教的なものの見方の一例が、この「コップのたとえ」には示されていると思うのです。



苦も人生の大事な一瞬

「生老病死を四苦というが、私にとっては四苦ではなく、四喜である」とは、平澤興先生（京都大学元総長）の言葉です。人生は、見方を変えると喜びと楽しみの連続だということです。詩人の坂村真民さんは、一般的には痛苦とされる病気を、「病が／また一つの世界を／ひらいてくれた／桃／咲く」と、むしろほのぼのとした感謝の意味あいをもたせて詠まれ、小説家の下村湖人は「私の住みたい世界は、苦悩が絶望の原因とならず、勇気への刺激となるような世界」と述べています。先の小林氏が、コップの水の話で示した「空」の教えについて「『同じ現象について、いかに喜びや楽しさを見いだしていくかの訓練なんですよ』ということをお釈迦さまは、私たちに伝えたかったのでは」（『宇宙が味方の見方道』／弘園社）というとおりに、苦しいと思う現象も、生きる勇気や新たな生き方につながるいろいろな見方、受けとり方ができるのです。それをただ一面的に苦しい、つらいとだけ見ていると、ずっとその「苦」にとらわれて、せつかくの成長の機会を逃すことにもなりかねないのです。

とはいえ、つらい現象を無理に前向きに受けとめようというわけではありません。ものごとを多面的に見るということ、そして、どれほどの苦悩も無常の真理や縁起の教えに照らして見れば人生のめぐりあわせや必然であって、しかもそれは、たとえば幼子が大人へと成長していくような創造的な未来へも結ばれるものです。少し時間がかかっても、苦悩を生きる糧や喜びに変える力が私たちにはあるのです。

ある小説に「よいことと悪いこと、そのすべてがいまの自分を形づくっているんだ。悪いことがなければ、いまのきみにはなっていない。よいことがなければいまのきみになっていないのとおなじだ」という一節がありました。苦しみも悲しみも、自分の人生の大事な一瞬であり、貴重な人生経験です。「過去の集積が『いま』をつくっているとしたら、遠い未来を見据えて『いまから』をどうデザインするかによって、未来も過去も変えることができる」とは、理論物理学者の佐治晴夫先生の言葉ですが、そのような意味でも、過去から積み重ねた苦楽のどちらをも一生の友として、未来の自分、未来の大人、そして未来の地球のために、私たちは「いま」を生きることが大切なのです。

（『佼成』2026年6月号）



最期の一息まで、布教の道を一步ずつ

スリランカ教会、デルゴダ・スワルナパドミニ

この体験説法は、2026年3月15日に大聖堂で行なわれた「釈迦牟尼仏ご命日（布薩の日）」のなかで発表されたものです。

皆さま、お願いいたします。

インド洋に浮かぶ光り輝く島、スリランカから参りましたデルゴダ・スワルナ・パドミニと申します。現在、スリランカ教会の総務部長、そして立正佼成会ダルマ財団の理事長という大役を頂き、仏さまの手足としてわが身を使わせていただいております。本日の体験説法は仏さまからのおはからいと心から感謝しております。

私は大家族のなか、六人の兄弟姉妹の四女として産んでいただきました。とても幸せな家庭でしたが、私が六歳の時、一家の大黒柱であった父が腸チフスで亡くなりました。父の死は私にとって大きな悲しみであり、また恐怖でもありました。その後も長い間、私はまるで世界が終わってしまったかのように感じていました。

その後私は家庭の事情で家族と離れ、英語で教育を受けられる全寮制のキリスト教系の学校に入学しましたが、寮生活はとても楽しく、休日も家に帰りたと思ったことがないほどでした。私がカトリックに改宗してしまうのではないかと心配した母は、その後、私を仏教系の学校に転校させました。そのことが、その後の私の人生の大きな転機となりました。寮の先生や友人たちに支えられ、充実した日々を送る中で、私が最も心を躍らせたのが休日ごとに挑戦していたお菓子やケーキ作りでした。「どうすればもっと美味しくなるかしら。」「どうすれば食べた人を笑顔にできるかしら。」この「誰かを喜ばせたい」という若い日の情熱が、後に私の人生を切り拓く起点となっていきました。

学校を卒業後、25歳の時に私の人生を大きく変えるご縁を頂きました。スリランカで誰もが知る老舗メーカー「マリバン・ビスケット工場」への就職です。最初は一介の作業監督員としての採用でしたが、私は幼い頃からの探究心を発揮して必死に働きました。海外の工場を見学して最新の技術を学び、来る日も来る日も新商品の開発に没頭しました。努力を重ねた結果、当時の女性には珍しく、異例の早さで工場マネージャーという責任ある立場に昇格しました。



大聖堂で説法をするデルゴダさん

同じ頃、友人の紹介で素晴らしい主人と出会うことができました。おかげさまで、主人とは生涯にわたって、ただの一度も言い争いをしたり、きつい言葉を交わしたりすることのない仲の良い夫婦でした。徐々に仕事も家庭も充実し、愛する息子も授かり、幸せな家庭を築くことができました。

しかし1989年、スリランカは政府軍と反政府武装集団との激しい政治暴動の嵐に飲み込まれました。街中には銃声や爆発音が絶えず、いつどこで命を落とすか知れないという、まさに「一寸先は闇」という「恐怖の時代」に突入していきました。会社の管理職の立場にあつたため、私の身にも危険が及ぶのではないかと思いはじめ、夜も眠れない日々が続きました。「このままでは、幼い息子の未来を守れない。」私は断腸の思いで、長年情熱を注いできたビスケット工場の仕事を辞める決意をしました。

その後、私は安全に生きていける場所を求め、友人の助言を得て、単身オーストラリアに渡りました。夫や息子と離れ離れになるのはつらい経験でした。しかし、幸いにも英語が話せたことと、職務上の経歴が認められたことで、すぐにメルボルンで仕事が見つかり、息子呼び寄せて私立の学校に入学させることもできました。こうして生活に再び落ち着きが戻ってくるのと同時に、私の

Spiritual Journey

心の中に「これからもずっと平和に暮らしていくために、私にできることはないだろうか」という問いが芽生えてきました。

1993年、スリランカの国内情勢に落ち着きが戻り始めたため、私は帰国を決意しました。大学生になった息子をオーストラリアに残し、主人の元に戻って新たな生活のスタートを切ることになりました。私たちはお祝い用の品々を取り揃え、誕生日や結婚式を企画制作する「パーティーショップ」を開業しました。当時のスリランカではそうした店は珍しく、ビジネスは瞬く間に軌道に乗りました。

そんなある日、お店に一人の男性がふらりと立ち寄られました。その人は、スリランカ教会がまだ連絡所だった頃のリーダーであったガミニ・チャンドラセケラさんでした。ガミニさんは「デルゴダさん、ぜひ一度、私たちの活動を見に来てください」と言って何度断っても訪ねて来るのです。その情熱に動かされ、ある日、私は友人を連れてスリランカ連絡所を訪ねました。そこで私は、生涯忘れることのできない光景を目にしたのです。それは、お立ちになった姿の仏さまでした。

スリランカは上座部仏教の聖地であり、仏像といえば座って瞑想されているお姿が常識です。しかし、連絡所におられた仏さまは、今まさに一步を踏み出し、私たちを救いに来ようとされているお姿でした。「座って待っているのではなく、私たちの方へ歩み寄ってくださる仏さまがいる。」その新鮮な感動は、私の心を温かく包み、大きな喜びで満たされるのを感じました。

それから私は、英語で書かれたご著書で開祖さまのご生涯を知り、教えを学びました。その中で、私はそれまで抱いていた「平和に暮らすために何ができるだろうか？」という疑問の答えを見出すことができました。「この教えこそが、私が求めていた真理だ」と確信し、1998年、正式に入会させていただきました。

み教えを学ぶほどに、私の心に希望が湧いてきました。それは「開祖さまのように、全ての人を幸せにしたい。そのためには、自分の人生を丸ごと仏さまに捧げたい」という強い願いでした。私は、繁盛していたショップを閉める決断をしました。周囲からは「もったいない」と止められましたが、私に迷いはありませんでした。ビジネスでお金を得ることよりも、み教えを伝えることで人の心を豊かにすることの方が、何百倍も価値があると感じたからです。それからの私は、自分自身に一つのルールを課しました。それは、「できない」「無理」「分からない」という否定的な言葉を、口からも心からも一切捨てることでした。



スリランカ教会で読経供養の導師をつとめるデルゴダさん

2010年、ついにスリランカ教会発足のお手配をいただき、初代教会長の山本芳久教会長さんから総務部長のお役を頂きました。折に触れて教会長さんが仰っていた言葉があります。「デルゴダさん、私たちすべての人の中に、尊い仏さまのいのちが生きているのですよ。」この言葉は、私の世界の見方を変えました。自分のいのちが大事であるのと同じように、目の前にいる人のいのちも、同じように尊いことに気づかせていただいたのです。

しかし、布教の道は険しいものでした。上座部仏教の伝統が強いスリランカでは、大乘仏教である立正佼成会の教えを広める私たちに対して、お寺や地域の人々から厳しい批判の声が上がったのです。特に大きな壁となったのが「法人登録」でした。スリランカ政府から宗教法人としての認可が下りず、不安定な状態の中で活動をせざるを得ませんでした。教会長さんがスリランカに滞在し続けることすら危ぶまれる中、私たちは必死に道を探りました。

「一人ひとりの中にいる仏さまを拝み、信じ抜くこと。」その願いが通じたのでしょうか、時間はかかりましたが「NGO財団としてなら登録ができる」という道が開け、ついに公式な団体として認められたのです。それは人間の力ではなく、私たち一人ひとりの中にある仏さまがひとつになって起こした奇跡に他なりません。

スリランカ教会では、2015年からスタートした「家庭拠点」を中心に、法座を中心とした日々の布教を展開しています。これは、信者さんのお宅をお借りして、地域の皆さんに呼びかけ、拠点長を中心に悩みや喜びを話し合う場所です。やがて「自分も拠点長になりたい！」という熱い誓願を立てる方がスリランカ全土から現れました。現在、その数は約80名に上ります。

Spiritual Journey

私も家庭拠点長の一人として、毎月24日、我が家のご本尊ご命日に法座を開いています。家庭法座の素晴らしいところは、家庭というリラックスできる場所だからこそ、参加者が心の奥底にある悩みを容易に吐き出せる点です。

ある時、法座で会員さんの悩みを聞いていた私は、ハッと気づきを頂きました。「私は今まで、夫に対してどれほど感謝できていたのだろうか」という私自身への内省です。10年前に他界した主人は、物静かで、私の一本気な気性をいつも優しく受け止めてくれました。オーストラリアに行く時も、戻ってきた時も、佼成会に入会した時も、ビジネスを辞めて布教に専念したいと言った時も、黙って頷き応援してくれました。法座を通じて、私は過去の自分を懺悔し、今も霊界から見守ってくれている主人に今まで以上の感謝を捧げることができるようになりました。

84歳の今、私はかつてないほど情熱に燃えています。スリランカの平和も、そして世界の平和も、誰かがどこかで創ってくれるものではありません。私たち一人ひとりが、自分の心の中にある仏さまを輝かせ、隣にいる人の仏さまを拜む。二代目教会長の鈴木教会長さんからも常々ご指導を頂いたとおり、法座の大切さをかみ締めてまいりたいと思います。この小さな「家庭拠点法座」の輪が広がることこそが、真の平和への道なのです。これからも「家庭拠点法座」を通じて、たくさんの方々にも教えを伝えてまいります。



説法当日、大聖堂に応援に駆けつけたみなさんと

スリランカには「たとえ牛車は遅くとも、道さえ正しければ目的地にたどり着く」という諺があります。焦る必要はない。ただ前向きに、正しい教えを信じて歩む。その姿勢を会員の皆さまにお示しすることが私の修行です。

結びとなりますが、「今、ここにあるいのち」を大切に、大宇宙、大自然の恵みに報恩感謝を捧げながら、私は最期の一息まで、コツコツとこの尊い布教の道を歩ませていただきます。これからもスリランカの地に、蓮の花が豊かに咲き誇りますよう、赤川教会長さんのもとで皆さまと共に精進してまいります。

本日は、最後までご清聴いただき、誠にありがとうございました。



赤川教会長(前列右から3番目)の就任式のあと式典の参加者と



すべての経験は悟りのため

ドミニク・スカランジェロ
立正佼成会国際アドバイザー



法華經の如来神力品に示される「即是道場」は、私たちが家庭や職場、学校など、日常生活のあらゆる場所を修行の場として教えを実践できるよう、そっと背中を押してくれる教えです。

私たちはこの数か月にわたり、苦を取り除くことをめざして「十如是」の法則を学んできました。言うまでもなく、私たちは仏教徒として自他の苦からの救われをめざしています。しかし、救われを求めるあまり、私たちは法華經の教えの大切な一面を見落しているかも知れません。前回、「出合うことすべてを幸せの因と見る」という開祖さまの教えをご紹介した際に、このことについてふれました。今月はこの点についてより深く考察してみたいと思います。

光祥さまは立正佼成会基本構想(2018-2037年)の中で次のように仰っています。「教えを実践したことで私たちは確かに現実の苦から救われ、人生は大きく転換しました。しかし、立正佼成会の教えは苦をなくするためのものではありません。」

このメッセージは、はじめは意外に聞こえるかも知れませんが、そして、「苦を取り除いて幸せになるために、私たちは仏さまの教えを求めているのでは？ 苦は問題ではないのか？ 仏道修行の目的は苦の原因を明らかにして取り除くことでは？」という疑問が頭に浮かんでくるでしょう。

しかし、光祥さまは続けて次のように仰っています。「立正佼成会の教えは、苦をきっかけに救われる教えです。泥沼にこそ大輪の蓮の花が咲くのです。」

ここには苦の逆説的な捉え方が示されています。私たちは苦から救われたいがために教えを求めます。しかしその一方で、苦と出会い、苦と闘う中でこそ、私たちは悟りを得ることができるのです。そのような見方をすれば、苦は私たちの人格を完成させ、より有意義で充実した人生に向けて私たちを歩ませてくれる縁にもなることがわかってきます。

皆さんの多くは大聖堂の境内に咲く蓮の花をご覧になったことがあるでしょう。蓮は最も美しい花の一つであり、清らかさと悟りの象徴でもあります。しかし、蓮の花は澄みきった清水の中では育ちません。飲めば病気になるってしまいそうな、よどんだ泥水の中で育つのです。

不浄で不快にみえる条件こそが、蓮を育て花を咲かせるのです。

私たちも同様です。

法華經はだれでも仏になれると説き、「方便品第二」には、「仏種は縁に従って起る」と記されています。しかし、この「縁」には私たちが人生で直面する苦しみも含まれているかも知れません。

「提婆達多品第十二」の中で、お釈迦さまは過去世において提婆達多の前身である阿私という仙人と出会い、そのおかげで悟りを得たことを説いておられます。長年にわたり、阿私仙は過去世のお釈迦さまに厳しい修行を課していたのです。

提婆達多の物語についてはご存知の方も多いと思いますが、法華經は私たちに対し逆境のとらえ方を根本から問い直すよう迫っています。提婆達多は単なる厄介な存在ではなく、歴史上の悪名高い犯罪者たちと同様に、凶悪な行為を働き、多くの人々に計り知れない苦しみを与えた、まさに悪意に満ちた人物でした。しかしお釈迦さまは、提婆達多が菩薩の役割を果たすことで、最終的には自身が悟りに至るために必要な縁を与えてくれたと説かれるのです。

これほどの重大な苦しみをもたらした人物を、どうして菩薩と呼べるのでしょうか？ その理由はどこにあるのでしょうか？



実は、その理由はお釈迦さまの御心にあるのです。

私たちの中には、困難な環境や他人の行動によって、大きな苦しみを経験してきた人がたくさんおられます。そうした経験の中に、何か意味のあることや有益なことを見つけるのは、とても難しいことのように思われます。またこの世の中には、病気や老い、愛する人の死、そして最終的には自らの死といった避けられない苦しみも存在します。

しかし仏さまの教えによれば、私たちが諦めたりくじけたりせず、そうした現実を悟りへの契機として受け入れたとき、その意味は一変するというのです。

では、一体どうすれば、そんな実践が可能になるのでしょうか？それを言葉にするのは簡単ではありません。しかし、私はこの真理の重要性を、がんで亡くなった二人の大切な人から学ぶことができました。

一人はがんの診断を受け入れられず、周囲の世界に対する怒りに囚われていました。その怒りは、与えられたいのちやそれまで受けてきたご恩への感謝の気持ちを覆い尽くし、家族や友人との残された時間を大切に過ごすことも妨げてしまいました。その人は心の

中に苦々しさと恨みを抱えたまま、深い苦悩の中でこの世を去りました。

もう一人は病気に対し全く異なる向き合い方をしました。彼は現実を受け止め、病気を自らの修行としてとらえることを選びました。彼は大切な人との絆を深めるために時間を使い、自身の人生が愛で満たされていることに気づきました。そのときに感じた温かな気持ちと愛情は、それまでの人生で経験したことのないものでした。死を目前にしても、彼の心は自らのいのちや人生で経験したすべてのことへの感謝の思いで満たされていました。現実を受け入れたことで、彼は病気そのものを悟りへの縁としてとらえることができたのです。

二人は私のために菩薩となってその身を使い、悟りに向けてすべての経験を受け入れることの大切さを私に教えてくれました。

人生のあらゆる出来事は、たとえどれほど困難なものであっても、私たちに具わる仏種を开花させ、自身の人生だけでなく、周りの人々の人生をも美しく彩る縁となります。この真理を胸に刻み、日々を感謝の心で生きることが、いまの私の願いです。





サンガの現場レポート

シアトル支部布教責任者 ニック・オズナ

昨年の今頃、あるシアトル支部の会員さんが、人生が一変するほどの試練を経験されました。この会員さんは信仰熱心で、日頃からシアトル支部を献身的に支えてくださっている素晴らしい方です。ある春の日、季節外れの陽気のなか、彼は自転車に乗っている最中に心臓発作を起こし、病院に緊急搬送されました。一時、心停止を起したため、彼は救命処置を施され、昏睡状態のままベッドに寝かされていました。家族は彼のそばに付き添い、サンガの仲間も毎日集まって彼のために祈りました。

すると、それから一か月後、昏睡状態にあった彼は、驚くべきことに人工呼吸器が外された直後に突然目を覚ましたのです。サンガの全員が彼の意識が戻ったことを喜び、早期回復を願って再び祈願供養をしました。その時は、彼自身も病院のベッドからZoomで参加することができました。のちに彼は、苦しかった時にサンガから頂いた力強い祈りに心から感謝していること、そしてその祈りのおかげで病気の全快を信じる力を持ったことを私に話してくれました。

しばらくして、歩いたり、話したりすることができるようになると、彼はシアトル支部で行なわれた式典に参加しました。その姿に気づいたサンガの仲間は、彼と一緒に喜びを分かち合いました。彼はサンガを前に、いま命があるのは仏さま、家族、サンガの仲間、そして医師たちのおかげさまと、深い感謝の気持ちを語り、大切な自分の命を、より多くの人のために役立てていきたいと話してくれました。

それから数か月間、彼はリハビリを続けながら、まさにその気持ちを実行に移していきました。しかしその一方で、彼は心身の両面で健康の回復が思うように進ま

ない時があることを感じていました。最近、彼はこうした健康面の問題をきっかけに、自分自身に疑問を感じていることを私に打ち明けてくれました。長年にわたって数多くの善行を積み、毎日欠かさずご供養を続けてきたにもかかわらず、なぜこのような苦難に遭わなければならないのか、その理由を知りたがっていたのです。

二人で話し合うなかで、私は彼に「意識を回復した直後の気持ちを思い出してみてください」と伝えました。すると彼は、今ここに生かされている、ただそのことに深く感謝していたことを思い出したのです。事実、主治医の話によれば、彼が経験したような治療を受けた患者の生存率はわずか10パーセントに過ぎず、さらに、症状がそれほど重くない患者でも、生き延びたものの怒りや恨みの感情にとらわれて、回復に苦労している人も少なくないのです。

彼は試練を経験したことで、同じような境遇にいる多くの人を勇気づけ、力になれることに気づきました。こうして、彼の経験は不幸な出来事から、かけがえのない貴重な体験へと変わったのです。確かに彼は大きな試練を耐え抜かなければなりませんでしたが、生涯にわたって仏さまのご守護とお導きを信じ続けたおかげで、その苦しい試練の時を、仏さまから頂いたかけがえのない命の意味を見つめ直す機会へと転換することができたのです。これこそが真の救われなのです。

自身の経験を振り返ることで、彼はあらゆる経験は、幸運なものであるか否かにかかわらず、悟りに至るためにあること、それゆえ、すべての経験は仏さまから頂いた貴重な贈り物であることに、改めて気づくことができたのです。



仏さまの衣を着る

「忍辱」とは許すこと

立正佼成会開祖 庭野日敬



直子夫人と沖縄県久米島で（1984年）

結局、「忍辱」とは「人を許すこと」だと思います。だれの言葉だったか、「愛とは許すことである」というのがあって、それが強く心に残っています。もちろん、親子とか恋人とかという自然発生的な愛情は別ですけれども、一般の人間関係に生じる「愛」は、確かにそのとおりで、「許すこと」からはぐくまれてくるものでしょう。

私はそれに、「許すとは、理解することである」と付け加えたいと思います。

私が新兵に「殴らない」と宣言したのは、「殴らなければわからないような人間は、このなかにはいないはずだ」という理解があったのです。当時は軍縮時代ですから、徴兵検査で甲種合格して海軍に採用されるのはたいへんな難関でした。そういう一人前の人たちにビンタを張るなど、ずいぶん失礼な話だ、という考えがありました。そう考えると、ひとりで「大切な人たちだ」という気持ちが湧いてきて、それが「殴らないぞ」という決意になったわけです。

これは、けっして自慢話ではありません。忍耐と、非暴力と、理解と、愛情との微妙なかかわり合いを、自分の体験にもとづいてお話ししたにすぎません。

お釈迦さまが出家されたあと、育ての母の摩訶波闍波提は、いつかはお釈迦さまに着ていただきたいと思い、自分で糸を紡ぎ、その糸を織って、金糸で刺繍をしたりっぱな衣を作りました。お釈迦さまが成道されて、初めて故郷のカピラバストゥに帰られたと

き、その衣をささげましたが、お釈迦さまはそれを教団に寄進されました。しかし、あまりにりっぱすぎて、だれも着ようとしません。

そこでお釈迦さまは、弥勒菩薩にその衣を着るように命じます。弥勒菩薩がそれを着ると、その姿に仏さまと同じような三十二相が現われ、弥勒菩薩が托鉢に出ると、町の人びとはただ見とれるばかりで、食物をさしあげるのも忘れるほどだったといえます。

二千五百年後の現代に生きる私たちも、心に「柔和忍辱」という衣を着るならば、きっとその姿に仏さまの相が現われるでしょう。お金のかかるりっぱな服を着るよりも、これが最上の身の装いなのです。

しかも、その「徳」はみなさんを中心にして波紋のように広がり、社会を、日本を、そして地球上全体を「和」の世界に変えることでしょう。どうかみなさん、そのような大きな気宇をもって、仏さまの衣を着てほしいものです。

庭野日敬平成法話集1『菩提の萌を發さしむ』p.99-101



心ひとつでひらく未来

国際伝道部長
前田貴史

歴史を振り返りますと、大きく時代が動くときには、いつも同じような不安がありました。そして、その中から新しい社会や生き方が生まれてきました。そう考えますと、私たちもまた、その大きな流れの中に生かされていることがわかります。

会長先生は、「不満を感じるのも喜びや感謝で受けとるのも、すべて『私』自身の心」と教えてくださっています。出来事そのものではなく、その受けとめ方によって、苦しみが深まることもあれば、やわらぐこともあるのです。同じ出来事でも、「なぜこんなことが」と嘆くのか、「ここから何を学べるのか」と受けとめるのかで、心のあり方は大きく変わってまいります。

だからこそ、出来事にすぐに反応するのではなく、少し立ち止まり、その意味を見つめることが大切ではないでしょうか。仏教では、すべてはご縁の中で起こり、移り変わることが説かれます。苦しいことも、うれしいことも人生の一部であり、私たちが育てる大切なはたらきです。

振り返れば、あのときの経験があったからこそ今の自分がある、と気づかされることも少なくありません。不安や迷いを感じる時こそ、外に答えを求めるのではなく、自らの内面に目を向けたいものです。そして、「今、自分にできる一歩」を、確かに踏み出してまいりましょう。その一歩は小さくとも、決して無駄にはなりません。確実な一歩が道をつくり、その歩みの先にこそ、新しい未来がひらかれていくのです。



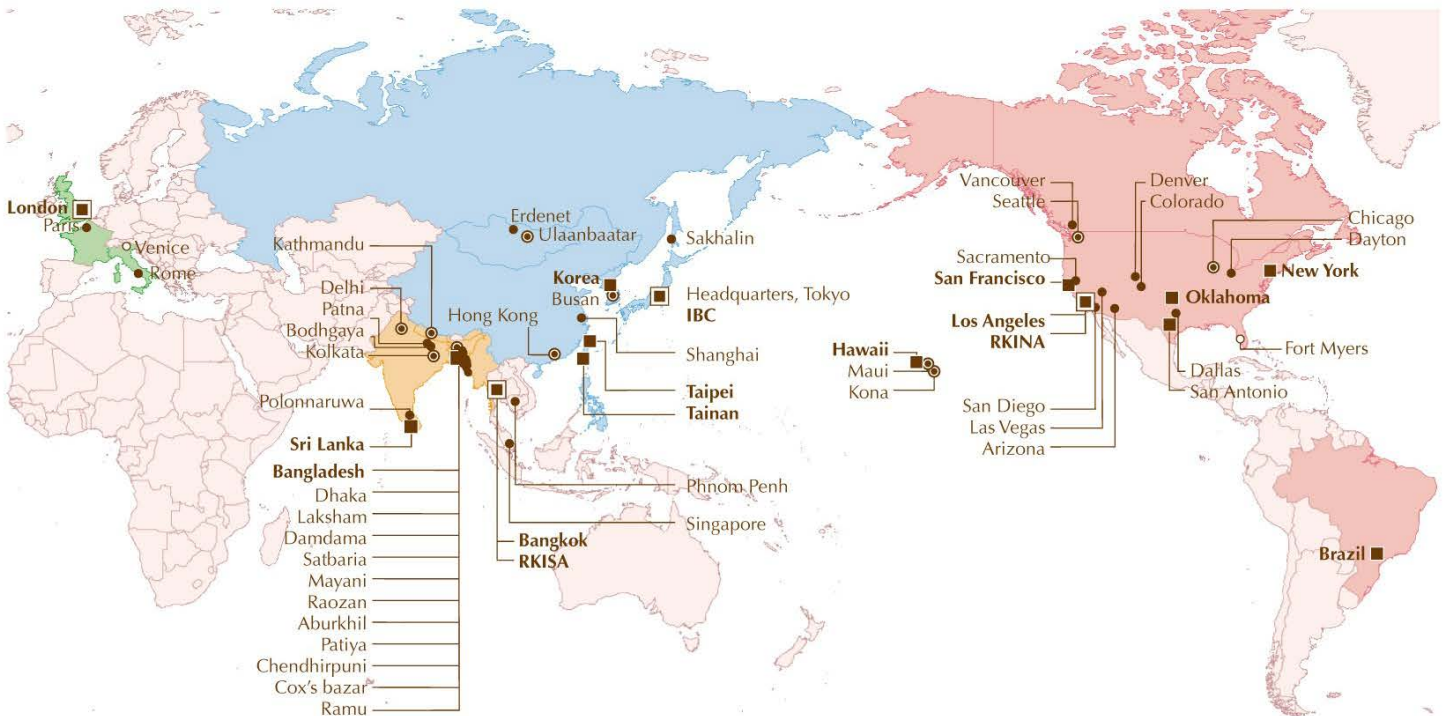
4月6日、降誕会団参のため来日したウランバートル支部の会員を国際伝道部のオフィスにお迎えして（前列中央が前田部長）

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp